

「家がいいね」 第154号

いせ在宅医療クリニック 広報月刊紙

2017. 3. 13



山国に生まれた私は月の出も仰ぎ見るだけだと思っていました。小学校の修学旅行で、二見浦に来た時は、水平線が目の高さ以上に見えて、怖さまで感じたものです。いつしか、伊勢平野のこの開けた景色が心地よく、遠くの山々の重なりや、昇る月の大きさや色合いに、つい見入っています。冬の寒風と流れ雲を、月が照らします。

我が母を送る

人の一生を見送るのなら、老衰がいいと他者の看取りの中で思ってた来ましたが、いざ身内となると、心身の衰弱をひとつひとつ受け止めるつらさを感じました。おまけに母は大正生まれで教えこまれた几帳面な頑固さと、世間体が第一を譲りません。身体が弱っても達者な口には往生しました。自宅介護はあきらめざるを得ず、高齢者住宅に1年半ほどお世話になりました。食事をとれなくなつたため最期は自宅でと、ホームホスピスゆずさんに10日間お世話をいただいたお陰で我が家に戻すことができました。家族と数日の共暮らしを経験し孫娘が添い寝をしての在宅看取りでした。小さくなる母は少しずつ人生の折り合いをつけました。私が診断書を作成して、44年待った父の元へと旅立たせました。



映画「この世界の片隅に」

この主人公の**すずさん**も母と同じく、戦争が日常と地続きになつた時代を生きたのだと知りました。欠乏と喪失を伴いながらです。**すずさん**は子どもの魂を持ちつつ一途に婚家に馴染もうとしますが、寺の次女に育ち、プライドの高い母は辛かっただろうと私は感じました。



ホームホスピスあこやに、在宅医として思う

振り返りますと、病院での経験からこんな見送り方はしたくなかつたという家族の負の遺産により在宅医療を目指した方々との出会いが多かつたです。最近はこのう看取りもできると知つたので、在宅の依頼も徐々に増え、地域の医療や介護を巡る文化が少しずつ変わってきたようにも思えます。また、せっかく在宅看取りができて、家族近親だけの共有に留まっていたのが、先月号のように、地域の話題にしても良いと協力される方も現れています。「住み慣れた町で生活し、最期もこの家で」の願いは、少しずつ目に見えてきたように思います。

この先に地域で安心して住み続け、老いて、最期まで迎えることが、実際にこの「あこや」というもうひとつの家で支えられ、確認できるなら素晴らしいことです。

地域に根をおろし、地域に花を咲かせる「ともぐらしの家」が継続できることには、医療の役割として、今後も最大限の協力を参りたいと思います。

「あこや」とは素晴らしい命名を市原美穂さんから頂いたと思います。核を自らの貝の中に受入れ、傷を治す力で真円の真珠に替え、また外の光を自らの中に温かく表現できる存在として、大事にしたい宝物です。皆様と共に、この地域の共有財産を次世代のためにも存続維持してゆきたいと、切に願っております。

(写真はホームホスピス協会の高橋紘士先生を真ん中に)



自宅での人生を
最期まで支援します

〒516-0805
三重県伊勢市御園町高向 927
電話 0596-20-8104
ファクス 0596-20-8105

メール homecare@kr.tcp-ip.or.jp
ホームページ <http://isezaitaku.com>

↑バックナンバーはここで閲覧可